

# 山川地域



国指定天然記念物

## 鹿児島県のソテツ自生地

かごしまけん

じせいち



竹山に自生するソテツ

ソテツは裸子植物に属し、雌株と雄株がありますが、被子植物や他の裸子植物（イチヨウを除く）と違って、雄性配偶子として精子を作りま



薩摩半島南端の指宿市山川、南さつま市坊津<sup>ぼうづ</sup>と、大隅半島の南大隅町佐多、肝付町内之浦に自生するソテツは、自生の北限地として天然記念物に指定されています。やや乾燥した原野の岩石の上に生

え、特に指宿市山川の竹山や佐多岬では、海岸近くの絶壁に生育

しているのが特徴です。

ソテツは裸子植物に属し、雌株と雄

ツ科には数種類あり、ほとんどが熱帯または亜熱帯に自生しています。そのうちの一種だけが日本南端にまで達しており、その分布は八重山列島、沖縄諸島、奄美諸島から九州の南端まで及びます。



住所：指宿市山川福元区

## 山川薬園跡及びリュウガン

の茶褐色の実を実らせています。

山川庁舎の北側には、鹿児島藩で最も古い薬園（江戸時代に藩

などが直営した薬草園）がありまし

た。これは、

1659年に開園したもの

で、当時は「山川の島津薬園」と呼ばれ、数多くの薬草が植えてあつたといわれています。

現在は、樹



砂浜に見られる噴気帯

県指定天然記念物

## 伏目海岸の池田火碎流堆積物と噴気帶



住所：指宿市山川新生町35

指宿市山川の伏目海岸は、高さ30mの断崖が4km近く続く弓なりの地形をしており、海岸の南側にそびえる開聞岳とあわせて素晴らしい景観が作り出されています。この崖は約6300年前に現在の池田湖から噴出した火碎流堆積物（池田火碎流堆積物）や火山灰等から形成されています。約100mの厚さの池田火碎流堆積物

が残されているだけです。この樹は今でも、直径2センチほど

山川薬園跡で保存されているリュウガン

物のうち、200~300mの上部のみが露出し、それより下部の約

70~80mの堆積物は砂浜より下に埋もれており、当時の噴火の規模を知ることができる貴重な露頭です。

噴火当時は、現在の海岸線より沖合まで厚く火碎流が堆積していたと考えられ、東シナ海からの強い波で侵食された結果、現在のような弓なりの「海蝕崖」が形成されました。この露頭は、池田カルデラの形成を伴う巨大な噴火で、火山の持つエネルギーの大きさを知ることができます。

また、伏目海岸の波打ち際では、高温の温泉と噴気が噴出しており、県内で唯一の珍しい現象を観察することができ、大地が生きていることを実感できる貴重な教材でもあります。



伏目海岸の断崖と間間岳



住所：指宿市山川福元3339-2

また、伏目海岸の波打ち際では、高温の温泉と噴気が噴出しており、県内で唯一の珍しい現象を観察することができ、大地が生きていることを実感できる貴重な教材でもあります。

ツマイモは立派に育ち、隣の村はもちろん、瞬く間に日本の各地に広まり、大切な食料として多くの人を飢餓から救いました。

明治30年には、利右衛門の功績をたたえて徳光神社が建てられました。

#### 市指定有形文化財

## 前田利右衛門墓石



前田利右衛門墓石

前田利右衛門の墓  
は、岡児ヶ水区清水  
江戸時代、南島航  
路の船員であつた利  
右衛門は、宝永2

年にあります。

るなどの岡児ヶ水に植えました。種子島にサツマイモがもたらされ  
てから7年後のことです。



住所：指宿市山川岡児ヶ水2159

市指定有形文化財

## 小川六地蔵幢



小川区集落センターの北側に設置されています。

昔から日本では、「良いことをすると極楽に行く」、「悪いことをすると地獄に行く」といわれていますが、仏教では「生めは、死後、生まれ変わる」と説かれていました。

小川の幢には、豪族と思われる法名「雲心淨秀上座」とその妻が、生前の「現世安穩」、死後の「安樂天国への往生」を願った銘文と、天文22（1553）年の年号が刻まれています。この幢は、亡くなつた人への供養として、小川の人々が何百年もの間、大切に守つてきたものです。



板碑に刻まれた梵字

市指定有形文化財

## 鰐地蔵板碑

板碑とは、鎌倉時代以降、主に武士の間で流行した供養塔です。板や柱の形に整えた石の頭の部分を三角形にして、その下に2本の切り込



住所：指宿市山川小川210

みを入れ、その線の下の塔身  
の部分に文章や梵字などが刻  
まれています。

鰐池のほどりからやや東に  
上がったところにある鰐地藏  
板碑は、南北朝時代の元徳4  
(1332)年に造られたも  
ので、本市では最も古い年号  
の刻まれている板碑です。表  
面には「地蔵菩薩」を示す梵  
字が刻まれています。

南北朝時代には、日本に天皇が2人おり、日本各地で南朝と北朝  
に分かれて争いが起つっていました。

この板碑には北朝の年号である「元徳」が刻まれており、この地  
が北朝側の勢力圏であつたことを示しています。

市指定有形文化財

## 成川板碑

なりかわいたび

雄割撫の戦国世に、遠く近畿地方にまで巡礼した信仰の深さがし  
のばれます。  
当地方におけるこの時代の  
板碑は大部分が角柱形です  
が、成川板碑は関東地方の板  
碑によく似た薄型をしていま  
す。当時の信仰の状況と板碑  
の造形の研究上、貴重な資料  
です。

成川板碑は、鳴川(成川)一帯を治めた鎌田氏の居城跡と伝えら  
れる高台にあります。「西殿」と呼ばれるこの周辺には、今もなお、  
空堀と推定される痕跡が残されています。  
板碑の銘文によると、戦国時代の天正4(1576)年、鎌田政  
成が西国33カ所の觀音の靈場を巡礼したことが理解されます。群



住所：指宿市山川鰐地藏坂



正面から見た成川板碑



住所：指宿市山川井手方

## 成川十一面觀音座像及び石殿



石殿内の十一面觀音坐像

なりかわじゅういちめんかんのんさぞうあよ

せきでん

この觀音

座像及び石

殿は永禄9

(1566)

年、成川板

碑と同様に

鎌田政成に

よつて造立

たれるところです。

この文化財は、元は成川大坪にありました。後背地の崩壊によって亡失する恐れがあつたため、文化財保護の観点から、平成16年2月に成川板碑の隣接地へ移設しました。

木立の中にひっそりと立っていたこの石殿は、高さ約104cm、屋根の正面と軒に銘があります。この石殿の中には、十一面觀音座像を彫り出した板石が收められています。



觀音坐像が收められている  
石殿



旧正龍寺跡墓石群

## 旧正龍寺跡墓石群

旧正龍寺は、薩州山川海

雲山正龍寺といい、「三国名勝図会」によれば、山本氏が創建したといわれています。寺が開かれた年代は不明です。

明徳元(1390)年、京都南禅寺出身の虎森和尚がこの寺を再建しました。

その後、多くの名僧を輩



住所：指宿市山川成川井手方

出し、京都の有名な儒学者で、近世日本の朱子学の祖といわれる藤原惺窓をも驚かす学問的水準の高さを誇り、「薩摩文教の府」とさえいわれました。

また、薩摩の代表的貿易港である山川港に出入りする外国船の外交文書の授受も、寺の住職が当たっていました。しかし、明治の廢仏毀釈で廃寺となり、数多くの貴重な史料などが失われてしまいました。

廃仏毀釈で散逸したものを集めたのが、この墓石群です。

市指定有形文化財

## 地頭仮屋跡石塀 じとうかりやあといしへい

山川庁舎を取り囲む石塀は江戸時代に造られたものです。かつて、ここには山川郷の政治を司った地頭仮屋（江戸時代の役所）がありました。

石塀に囲まれた敷地は、187坪あり、庭の隅に高さ98cm、直径44cmの山川石でつくられた手水鉢が残っています。

地頭には、政治全般を行う「喰」（郷土年寄ともいう）、事務や検察などの仕事を担う「横目」、郷内の武士の指導や仮屋の警

備を行なう「組頭」の3つの役職が置かれました。

現在、北側と南側の石塀はものと姿をとどめていますが、東側と西側は大部分が残っています。石塀は山川石で造られており、隙間なく積まれています。



住所：指宿市山川新生町84



住所：指宿市山川福元5780



現在は山川庁舎の石塀になっている地頭仮屋跡石塀

市指定有形文化財

## 正龍寺宝珠付角柱石塔婆

石塔婆とは、供養のために建てた石の記念碑のことです。

この石塔婆には、阿弥陀三尊（中央に阿弥陀如来、左右に觀世音菩薩、勢至菩薩を配置した3体の仏像のこと）、觀音三尊（中央に觀音菩薩、左右に文殊菩薩、普賢菩薩を配置した3体の仏像のこと）、金胎大日如來（密教で最も位の高い如來）を表す薬師形（溝がV字形の彫り方）の梵字（仏を表した古代インドの文字）が刻まれています。

塔婆には、「□源上人という人物が、戦国時代の永禄10（1567年）山川に来て21日間滞在し、多くの人々を集め念佛講（仏の救いがあるようにと念佛を唱える集会）を行った」とが刻まれています。また、この塔婆を通るために経済的な支援を染め左衛門允夫婦の名も刻まれています。

※判読できなかったため□で表示



正龍寺宝珠付角柱石塔婆



住所：指宿市山川福元5.780

市指定有形文化財

## 河野覚兵衛家墓石群

河野家は、江戸時代に鹿児島藩の南方貿易に貢献した山川の豪商で、代々「覺兵衛」と称する家柄でした。墓石群の年代は、享保2（1717）年から文久2（1862）年にわたっており、初代から7代までの「覺兵衛」とその家族を含む12基の五輪塔が残っています。

五輪塔の高さは完全なもので約2mもあり、重量感あふれる造りをしています。また、「南無阿弥陀仏」の名号や多彩な文様が美しく彫り込まれています。

これらの墓石群は、山川石の造型美と山川港の発展史を物語る大切な文化財です。



河野覚兵衛家墓石群



住所：指宿市山川福元5.780

市指定有形文化財

## 桜井神社木像銘文

市指定有形民俗文化財

## 田の神石像



桜井神社木像銘文



住所：指宿市山川大山349

木像の背面には、天正6（1578）年に刻まれた銘文があり、「諸願成就巡（諸々の願いが成就する巡）」という一文があります。当時、この地を治めていたとされる長井播磨守（ながいはりまさのすけ）貞正（さだまさ）の名前や大山と小川の大宮司衆（神社での祭祀に奉仕する者）の名前、そして、仏師の名前が記されています。

大山桜井神社には、クスの木で造られた男女各一体の木像があります。男像は高さ約44cm、幅20cm、厚さ16cmで、女像は高さ33cm、幅18cm、厚さ約14cmです。木像の背面には、天正6（1578）年に刻まれた銘文があり、「諸願成就巡（諸々の願いが成就する巡）」という一文があります。当時、この地を治めていたとされる長井播磨守（ながいはりまさのすけ）貞正（さだまさ）の名前や大山と小川の大宮司衆（神社での祭祀に奉仕する者）の名前、そして、仏師の名前が記されています。



田の神石像



住所：指宿市山川成川下原

田の神石像をみると、短いそでの上着にたすきを掛け、下着は裁着袴（さいせきばかま）を着けています。また、右手には小さなめしげ（しゃもじ）、左手にはだんごのようなものを載せていました。均整のとれた安定感のある造りです。

薩摩半島の南端部には田の神石像は少なく、古い田の神像の南限を示すものです。なむ、この像は、成川の開田事業を行ったときの「水田稲作の守護神」として造られたものと思われます。

成川下原にある田の神石像は、明和8（1771）年、成川下春の二才中（15歳～25歳の青年）が造ったものです。「下春」とは、現在の下原のことです。「下春」ことでは、田の神石像

## 利永の力石

## 尾下の田芋田



利永の力石は、素朴な信仰の対象とされてきました。

利永の力石は、重さ  
97・6 kgの浜石です。現在  
は、大きい方だけが利永集落  
センターの庭に保管されています。力石の風習は、若者たちにとつて一つの通過儀礼でした。力石くらいの重さの物  
（ほぼ米俵ほど）を持ち運べ  
ることが一人前の証だったの  
です。



住所：指宿市山川利永468  
利永区民センター前に置かれています。



尾下の田芋田



住所：指宿市山川利永

昔、利永の青年舎の庭には大小2個の卵形の石がありました。若者たち

は、この石を持ち上げ、利永の力石を争っていました。古来、利永の力石には神が宿るとも信じられ、素朴な信仰の対象とされてきました。

昔、利永の青年舎の庭には、「田芋」（とうりす）という里芋によく似た芋が栽培されています。芋は、水田のような水のあるところに栽培されており、小芋ではなく、親芋を食べるのが特徴です。熱帯性のタロイモの仲間で、種子島以南の南の島々に広く分布しています。サツマイモの伝来以前は、南西諸島の人々の主食であったといわれています。かつては、新永吉や成川でも栽培されていましたが、現在は栽培されておらず、市内で唯一残されたのが尾下の田芋田です。

芋は、水田のような水のあるところに栽培されており、小芋ではなく、親芋を食べるのが特徴です。熱帯性のタロイモの仲間で、種子島以南の南の島々に広く分布しています。サツマイモの伝来以前は、南西諸島の人々の主食であったといわれています。かつては、新永吉や成川でも栽培されていましたが、現在は栽培されておらず、市内で唯一残されたのが尾下の田芋田です。

## こうのかくべえやしさあといしへい 河野覚兵衛屋敷跡石塀

河野覚兵衛は、山川港を本拠として海運を中心に活躍し、藩に大きな利益をもたらした豪商の一人です。

幕末になると、西歐列強が植民地を求めてアジアに進出してきます。こうした状況の中、将軍・徳川家慶、老中・阿部正弘の命を受けた島津斉彬は、新たな砲台の設置場所を検討するため、藩内を巡回。山川にもやってきました。そして、福元の蛭子、仮屋、充石、成川の八窪に定め、その夜は河野家に一泊しました。河野家は、島津家と密接に結びついていたのです。福元区には、現在も河野家の石碑が残っており、屋敷の名残を見ることができます。



現地では山川石製の石塀をみることができます。



住所：指宿市山川入船町80



西郷隆盛の襷

西郷隆盛の襷は、時代の変革の中で奔走した西郷の心安らいだ温かな一時を感じることができます。貴重な資料です。

蝦夷に残される襷は、幕末から城山自決まで、時代の変革の中で奔走した西郷の心安らいだ温かな一時を感じることができます。

西郷隆盛は、島津斉彬の側近として、篤姫の婚礼仕度を担当しました。戊辰戦争では、旧幕府側と戦った官軍参謀として活躍。その後、麻藩置県を実施するなど、明治新政府の首脳として奔走しました。明治6（1873）年、西郷は、鎮国を続ける朝鮮に開国を求めるため、朝鮮への派遣を政府に要望しますが、岩倉具視や大久保利通らの反対を受け、鹿児島に戻りました。その後の西郷の動向を物語るものに、蝦夷に残された一着の襷があります。

西郷は戻った年に、部下と獣犬1-3匹を連れ、鹿温泉を訪れました。そして蝦夷を離れる際、宿主への礼に獣犬を置いていくことになりましたが、宿主がこれを遠慮したため、代わりに襷を贈りました。なお、滞在中には「佐賀の乱」を起こした江藤新平が西郷を訪ねています。

## さいごうたかもり 西郷隆盛の襷

じゅばん

## 山川の舟車

やまがわ フネガイマ

山川では、海上生活とかかわりの深かつた地域を中心に、5月の節句ごろに「フネガイマ（舟車）」を作り、初めて生まれた男の子に贈る風習がありました。

フネガイマは、長さ2尺（約60cm）ほどの木製の舟で、帆柱から張られた紐に、サイノコ（猿の子）がぶら下げられています。サイノコは色とりどりの布で作られており、中には綿が詰められています。

また、舟には4つの車輪が付けられ、男の子はこれを引いて遊び回りました。フネガイマを引くと、車輪が「ガラガラ」と音を立てていました。



山川の舟車

ことから、「ガラガラブネ」とも呼ばれました。山川の船人たちの間では、「こいのぼりは大風を招く」と信じられていましたため、こいのぼりの代わりに、フネガイマを子どもに与えていたとも言われています。

## 成川銃薬方

文久2（1862）年、武藏国生麦村（現在の神奈川県横浜市）で、島津久光一行の大名行列に馬で乗り入れたイギリス人4人が、無礼打ちされる事件が起きました。いわゆる生麦事件です。

この事件によって、イギリスとの関係が悪化した鹿児島藩は、戦争になる可能性を考え、成川に成川銃薬方（火薬製造所）を造りました。

した。

成川が選ばれた理由は、水利に富み水車の設置が容易であつたこと、港があり原料を搬入しやすかったことなどが挙げられます。



山川港の絵図

当時、工場の周りには土塁がめぐらされ、外部からは中が

見えない造りになつています。また、藩の機密事項として、関係役人以外の出入りを固く禁じたといいます。

文久3（1863）年8月、薩英の外交交渉は決裂し、ついに戦争が起きました。成川銃薬方は、終戦から4年後の慶応3（1867）年に廃止されました。



山川石

## 山川石 やまがわいし

山川石は、福元付近で産出される淡黄色の岩石で、火口から噴出したもので、「福元火砕岩類」と呼ばれています。

山川石に含まれる岩

片や軽石は、侯川洲付近で最も大きく、福元



住所：指宿市山川成川

辺りでは小さく混在しています。また、竹山の上部に堆積する山川石の中からは、かつて貝の化石が採集されたといわれ、その噴出源は侯川洲で、一部は水中で堆積したと考えられています。

山川石は、多孔質で熱を通してく、断熱効果に優れた石材です。

乾燥した山川石の岩片を舌先に当ててみると吸い付き、多孔質を体感できます。

また、加工がしやすく、風化に強いため、地元では古くから石垣や板碑、墓石などに使われ、石敢當など多くの文化財として残っています。近世では、鹿児島藩主など、限られた人々の墓石に使われ、特別な石材であったことがうかがえます。山川石は、指宿にとつて貴重な石なのです。

## 山川港 やまがわこう

山川湾の地形は、約6300年前の海底火山の噴火によつて形成されました。湾の北・西・南側は、垂直に切り立つ崖（火口壁）で、西側の高低差は約80mもあります。湾の深さは、この崖が連続して落ち込んでいることから、約50mにもなります。奥行きは約2km、幅は約700mの湾曲した入り江で、湾内は、砂嘴（砂礫が堆积して海中に細長く突き出た地形）によつて外海と区切られています。

砂嘴が鶴のくちばしのような形をしていることから、江戸時代以降、湾内の山川港は「鶴の港」とも呼ばれています。

「やまがわ」  
は西欧諸国に初めて紹介された日本

東洋貿易に従事していたボルトガル人船長のジョルジエ・アルバレスは天文15(1546)年、マラッカから山川に来航し、約半年間滞在します。この間、人を殺害し、山川に逃れてきたアンジローと知り合います。アルバレスはアンジローをかくまい、同年末ころ、マラッカに帰る船に同乗させました。



鷲の港「山川港」

地形的な特徴かには避難港としても利用されています。

山川港は、大型船も安全に停泊でき、賈問船も多く来航する貿易港として、古くから利用されてきました。

地的的な特徴かには避難港としても利用されています。

その後、アルバレスはアンジローをフランシスコ・ザビエルに引き合いました。アンジローはザビエルに、過去の罪を告白したといいます。その時のザビエルは、知識欲旺盛なアンジローに深く感銘を受けたと書簡に記しています。

アルバレスは翌年、ザビエルの依頼を受け、ヨーロッパ人として初めて日本のことなどを記述した『日本報告』を著しました。これにより、ザビエルをはじめ多くのヨーロッパ人が、日本という国の様子を初めて知ることになったのです。つまり、アルバレスが著した日本こそが、山川そのものであったのです。

ザビエルは、『日本報告』やアンジローが話す日本の様子を聞き、日本でのキリスト教布教を決意したのです。

## 長崎鼻

「天山村にあり、此地の尖髪海中に突出すること数町にして、松樹森然たり、故に長崎鼻といふ、此地に望哨を置く、遠望によき所なればなり、…」

幕末に編纂された『三国名勝圖会』には、長崎鼻のことがすでに紹介されています。

現在の長崎鼻を形成した溶岩は、約10万5千年前～11万年前の阿多カルデラの噴火以前のものと推定されていますが、その火山活

動が起つた時期は分かつていません。



長崎鼻にみられる溶岩



住所：指宿市山川岡児ヶ水

縄模様を描くようにうねる長崎鼻の岬の形は、溶岩が海へと流れ出た際、打ち寄せる波で徐々に冷やされて形成されたものです。岬の突端から灯台の方を見ると、その様子がよく分かります。途中にできた潮だまりは、大自然が生んだ天然の「水族館」。ナマコや貝、カニや小魚など、磯部の生き物を観察できる絶好のポイントです。昭和31年に発行された『薩南觀光写真大観』でも、秀案開闢活動を右手に望み、遠く大洋に浮かぶ屋久島、種子島、硫黄島の展望こそ天下馳」と云つても良い」と絶賛されている長崎鼻。海と溶岩が織りなす秀麗でダイナミックな風景が、竜宮伝説を生んだのかもしれません。



大山神社内にある齊彬来郷記念碑

## 齊彬来郷記念碑

幕末・西歐列強が開港を迫っていた時代、琉球には英仏の軍艦が押し寄せ、通商を求めていました。

弘化3（1846）年、この琉球問題解決のために島津齊彬は、幕府の命令を受け鹿児島に帰つて来ました。齊彬は、迫り来る西歐列強の脅威に対抗するため藩内を巡査し、山川港の沿岸4カ所に新たな砲台の設置を命じました。

山川の豪商・河野覚兵衛宅に一泊した齊彬は翌日、竹山の麓で砲術訓練を行い、小休憩のために大山の正護寺にも立ち寄つたようです。

正護寺の跡地には、「大山の住民は、親しく公の颯爽たる英姿と崇高なる盛徳とを拝し、歓喜欣慕強く所を知らざりしと

「言う」と記した碑が建っています。碑文から、斎彬の来訪で歓喜に沸いた地元の様子が伝わってきます。今風に言えば「斎彬ファーバー」と言つたところで、どうか。緊迫した状況の中、それだけ斎彬に期待する気持ちが大きかったことの表れかもしません。

翌年、家老であつた調所笑左衛門廣輝の總指揮の下、斎彬が構想した砲台が築かれました。その7年後の安政元(1854)年、米軍艦が山川沖に来航したのです。



住所: 指宿市山川大山3404

時代の流れとともに、温泉熱利用製塩は品質や生産性に限界が見えてきたため、昭和34年、真空タンクの中で水分を蒸発させ塩を取り出す「真空式製塩工場」が成川に建設されました。しかし、5年後の昭和39年、廃止に至り、本市の塩業は幕を閉じたのです。成川浜にそびえ立つ一本の煙突。これは、かつて指宿でも塩作りが行われていた名残なのです。

現在は草木に覆われてしまった製塩工場跡



住所: 指宿市山川成川

日本は、岩塩などの塩資源に恵まれていないため、人々は昔から海水を利用して塩を作っていました。海水をいつたん濃い塩水に濃縮し、それを煮詰めて塩の結晶を取り出す日本独自の製塩方法の原理は、昔から変わっていません。本市での本格的な塩業は、大正11年に始まります。温泉熱を利用し、水分を蒸発させる温泉熱利用製塩が、市内の各所で行われました。

昭和17年、政府は戦争による塩不足の対策として、簡単な手続

## やまがわづけよう 山川漬用の大壺



山川漬用の大壺

中世のころから国際貿易港として栄えた山川港には多くの唐商人が訪れ、港近くには唐人町と呼ばれた滞在地がありました。山川漬が「唐漬」と呼ばれるのは、漬け込みに中国製の壺を使ったからだともいわれます。

その製法は独特で、織維が多く歯ごたえのいい練馬大根を泥付きのまま1ヶ月ほど干します。泥付きのまま干すのは、大根の表面が傷むのを防ぐためで、乾燥度約90%、ネクタイのように結べる程度にしなびたら、海水入りの木臼に入れ、きねでつきます。こうすることで泥が落ち、柔らかくなっています。また、海水で洗うとまろやかな味に仕上がるといいます。乾燥後、塩をまぶしてきねでついてなじませ、底

う大きな壺を見かけることがあります。この壺は、かつて山川漬を作った際に使われていたものです。

にすのこを敷いた壺にすき間なく詰め込みます。重しをせずに密閉して数ヶ月間熟成させると、独特的の風味と甘みを持つ香ばしい山川漬が出来上がります。

## ツマベニチヨウ

指宿市の市蝶として知られるツマベニチヨウ。JR山川駅周辺は、ツマベニチヨウの宝庫としても有名です。ツマベニチヨウは、シロチヨウ科に属する世界最大のシロチヨウで、西はインドから南はジャワ島付近まで東洋熱帯に広く分布しています。九州南端はその北限にあたり、薩摩半島では、野間半島から枕崎市にかけての地域と本市に大別される2つの生息地があります。



ツマベニチヨウ

ツマベニチヨウの分布は、個となる食草であるギョボクの分布にほぼ一致します。奄美大島ではアブラナ科のイヌガラシという多年草に産卵が認められたり、飼育例でもキヤベツなどを一時的に食べたりすることが分かっています。ですが、主要な食餌は、キヨボク属に限られるそうです。

春から晩秋にかけて、風光明るい港とダイナミックに乱舞する「幸せを呼ぶ蝶」が、降り立つ人々を出迎えてくれます。

## こうじんの 荒神碑



荒神碑

JR山川駅に近い成川浜に、山川石の荒神碑があります。

この荒神碑は、幕末の文久3（1863）年11月に造られた、1m20cmほどの八角面の石柱です。神の依り代、神体石として崇められ、現在では土地の内神として祭られています。

この碑には、荒神のほかにも、水神や山神、掛部奉行を始めとする当時の山川郷の役人たちの名前が刻まれています。私たちがイメージする荒神は、荒々しい魂を持つ「アラガミ」です。また、水神は水害を起こし、山神は火山の噴火を起こす神威の強い神様が思ひ浮かびます。この三神を祭る碑を建てることは、あらゆる災いや外患から人々を守るという祈りを想起させます。

この荒神碑が建てられた

時代背景はどうだったのでしょうか。

当時、鎖国を脱したばかりの日本は、攘夷と開国との二つの国論を二分する状況で、朝廷も攘夷を政策としていました。また、西欧

列強の諸国から國土を守るという意識が強く働いていました。

前年の文久2（1862）年には、鹿児島藩主島津忠義の父、島津久光の行列を横切らうとした馬上の外国人を、家臣が一刀のもとに切り伏せ、後に薩英戦争へと発展していく生麦事件が起こりました。

この時期、荒神碑がある成川浜一帯には、薩の火薬製造施設が造られています。成川の梅月寺を移転させ、そこを「詠葉方」という役所とし、川沿いに水車を設置して硫黄などを碎いたり、火薬を調合したりする工場を設置しました。

成川浜が火薬製造施設の場所に選ばれた理由は、水車用の川や山川港から船による運送の便利性、また外来者に対する監視の目が行き届きやすかつたためと考えられます。この危険な火薬製造事業と、内外の情勢に鑑みて、山川郷の人々が悪魔退散を祈願して荒神碑を建てたことがうかがえます。

荒神碑建立以降の歴史は、

薩英戦争を起點に、英・仏・米・蘭の四国連合艦隊下関砲撃のあと、幕府による長州征伐があり、大きなうねりの中で攘夷から倒幕へと一気に突き進んでいきます。



住所：指宿市山川成川

## 保川洲

保川洲は、竹山沖に浮かぶ高さ44mの火山の名残です。竹山にみられる地形は、地下から競り上がったマグマが冷えて固まり、周囲の柔らかい地層が侵食された火山岩壁と呼ばれるものであります。保川洲はその小さいサイズのものと考えられています。

島の下部は、海水の浸食作用で、小舟が通り抜けられるほど穴がボッカリと開いていて、海食洞と呼ばれる地形が作り出されます。江戸時代にはすでに保川洲と表記されていましたが、明治7年



保川洲

年の海図では「保潛」と表されていました。また、大正7年の海図には「股潛」と表され「mata gusu」のルビが振つてありました。「股潛」は文字どおり人の股を潜るという意味です。

この言葉が当てられた理由に、ある故事が関係しています。古代中国では、「大望を持つ者は目先のつまらないことで人と争つたりしない」こと

の例えとして「韓信の股潛り」という言葉があります。これは、武将であつた韓信が、若いときに町でならず者に言い掛けられ、耐えてその股をくつたが、後に大を成したという故事です。そのため、保川洲の人が足を広げたような姿から、「保潛」あるいは「股潛」といった字があてられたと考えられます。

## 海軍山川方探所



海軍山川方探所

山川中学校の西側に隣接する山川電波観測所。この観測所の奥には、第2次世界大戦当時、海軍山川方探所」と呼ばれた軍の施設が残つています。小さな自然の丘のようですが、上から見ると、四角い形をしています。一辺の長さは約30m。現在はふさがれていますが、南西側に3カ所、北東側に2カ所の出入り

口があり、そこから地下へと続いていました。この海軍山川方探所は、田良浜の指宿海軍航空基地建設に伴い設けられた電波送信所で、昭和8年に設置されました。昭和61年に出版された「山川電波観測所 四拾年のあゆみ」という本には、「旧耐弾送信室」と紹介されています。

指宿海軍航空基地は、昭和

大山郷土資料館には、地区で収集されたさまざまな民具などが展示されています。そこに保管されている木箱には、精緻で美しい騎馬像の彫刻が收められています。

彫刻のモデルは、鹿児島藩出身の大山巖です。明治時代の軍人で、西郷隆盛のいとこに当たる人物です。日露戦争では、同じ鹿児島藩出身の東郷平八郎と並んで、「陸の大山、海の大郷」と評されました。

## 大山神社の騎馬像

おおやまじんじや

さばそう

20年5月5日の空襲でほとんど焼失しましたが、海軍山川方探所は、現在も当時の面影をとどめています。海軍山川方探所は、第2次世界大戦の様子を物語る貴重な戦跡の一つです。



大山巖の騎馬像



住所：指宿市山川成川

大山は、西南戦争において政府軍の指揮官として、皮肉にも西郷降盛らと戦います。大山はこのことを生涯気にし、一度と鹿児島に帰ることはなかったといわれています。

騎馬像の作者は、明治から大正にかけて活躍した彫刻家の新海竹太郎です。高村光太郎や萩原守衛らと共に日本近代彫刻を築き上げた人物です。新海は、自身が騎兵隊にいたこともあって、騎馬像を得意としていました。この大山巖の騎馬像も彼の代表作の一つです。もともとこの像は、大正12年に巖の子である大山柏が大山神社に奉納したものでした。伝承によると、大山巖の祖先は、佐々木姓を名乗っていましたが、中世の動乱期に大隅から大山に移住した後、大山姓を名乗つたといわれています。大山神社は大山巖の祖先、佐々木一族の靈を祀った神社と伝えられており、明治の初めまでは佐々木神社と呼ばれていました。



住所：指宿市山川大山3332

## 山川漬の大根突き機



大根突き機

開聞岳を背景に、やぐらにすらりと干された白い大根。山川漬の寒干し風景は、冬の風物詩として知られています。寒干しの後は、柔らかくなつた大根を海水で洗い、塩をまぶしながら杵で突く。冬の手作業は大変な仕事でした。

「何とか、効率良く大根を突けないものか…」

昭和38年2月、幼いころから山川漬製造に打ち込み、地元で「ツケモンじいさん」と親しみを込めて呼ばれていた西真造さん。孫の手押し車にヒントを得て、動力式の大根突き機械を発明しました。この発明で、大根突きの効率は10倍に飛躍したそうです。

西さんは農業改善事業の合理化は大根突きの改善からと地区的人々に訴え、地域のために機械の特許も申請しませんでした。

当時の新聞で「真造式デコンつき機（正式名称は真造式ダイコン洗練機）」と紹介されたこの山川漬専用マシーンは、地場産業に寄与するところが大きいと高く評価され、その発明に対して科学技術賞官賞が授与されました。



町区と福元区では多くの石敢當を見ることがあります。

そこで市では、平成26年に町区と福元区を対象として、両区にある全ての石敢當の記録作業を実施しました。調査の結果、石敢當は64基あることが確認され、分

丁字路などの突き当たりで、将棋の駒のような形をした石造物を見かけることがあります。これは「石敢當」と呼ばれる、中国を起源とする魔除けの石標です。中国では古くから、丁字路は魔物が横行する場所と考えられていました。石敢當は、魔物が突き当たりを直進して屋敷内に侵入するのを防ぐために建てられたと言われ、この風習は唐の時代まで遡ることができます。

日本における石敢當の分布をみると、最も多いのは沖縄県で、その数は1万基を超えてています。次いで鹿児島県で千基余りとなっています。中でも、山川港の周辺には濃密に分布していることが知られています。

## 石敢當

布密度から見ると、県内でも最も多い地域の一つと言えるでしょう。

町区と福元区には、なぜ石敢當が多いのでしょうか。石敢當が鹿児島へ伝わったルートは、中国から琉球へ、そして鹿児島藩による琉球統治の結果として、首里・那覇から直接的に鹿児島藩へ伝わった、とする説があります。

山川港は、江戸時代の鎖国体制の中、鹿児島藩の藩港として当時外国であつた琉球との貿易の窓口となり、藩の経済を支えていました。当時の山川の人々が、琉球の文化や風習に触れる機会が多くなったことが想像できます。

また、今回確認された石敢當の9割は、福元を産地とする黄色の山川石製ですが、中には御影石やコンクリート製のものも見られました。家に石敢當を置いている人に話を伺つたところ、石敢當は魔除け・守り神であることから、家を建て替える際などにも、場所を移し替えたり作り替えたりして残しているそうです。さらに、お供え物をし、大事にしているという話を伺うことができました。現代まで残り、伝えられてきた石敢當は、かつて山川港が日本の南の玄関口として琉球に通じていた歴史を物語っています。

## 琉球漆器

琉球漆器は、江戸時代に琉球王国で作られた美術工芸品の一つです。琉球漆器の歴史は長く、今から約700年前、中国・明との朝貢交易が盛んだった琉球王国時代に中国から伝わったもので、琉球

王国の歴上品として製作されました。

漆器製作には、漆が乾燥する温度と湿度が重要です。一年中温暖で湿度の高い沖縄は、漆の乾燥が早く、最適な環境といわれています。琉球漆器は、沈金、螺鈿、箔絵、堆錦などの技法で製作され、椀、皿、盆、重箱、湯桶、卓などの種類があります。主に朱色や黒色の漆で塗られ、朱の鮮やかな美しさは他に例を見ない、美術的にも優れたものと高い評価を得ています。

鹿児島藩に統治されていた琉球王国には、目摺奉行という部署がありました。ここでは、琉球漆器の受注、製作、管理、発送までを一手に担っていました。鹿児島藩から注文を受けると、全ての経費の見積書を送つてから製作していました。このことから琉球王国では、琉球漆器が鹿児島藩から強制的に作らざるを得ていなかつたようです。



中保家所蔵の琉球漆器

琉球漆器は、薩摩の海運業者によつて運ばれました。指宿市内では漆や宮ヶ浜を拠点とした瀬崎太平次や、山川港を拠点とした河野覚兵衛などの海運業者がその役を担つていたと考えられます。市の個人宅には、その

琉球漆器が守り伝えられており、宮ヶ浜の商家に伝わる重箱や、湊地区の海運業者に伝わる湯庫などがあります。

## 成川遺跡

なりかわいせき

山川成川字曲り道にある成川遺跡は、昭和32年、土採り作業中に発見された遺跡です。翌年には文化庁による発掘調査が行われ、成川盆地を見渡せる丘から下る斜面に、弥生時代から古墳時代にかけての墓が造られていることが分かりました。これまで出土した人骨の数は348体にものぼります。

墓は地面に穴を掘つて埋葬する土塙墓<sup>どづか</sup>というもので、中には、墓標<sup>ぼうひ</sup>と考被される長さ1m以上もある平たい石を立てた墓（立石土塙墓）<sup>たていせきどづか</sup>もありました。

立石土塙墓は、

教育委員会による発掘調査も実施されています。



成川遺跡で検出された人骨

現在のところ指宿市<sup>さしづきし</sup>の成川遺跡と南摺ヶ浜遺跡<sup>みなみのりくわはま</sup>、枕崎市の松ヶ尾遺跡<sup>まつがお</sup>の3遺跡しか発見

例がなく、南薩特有の墓と考被られています。

また、成川遺跡では、おびただしい数のお供えの土器や鉄器が見つかりました。

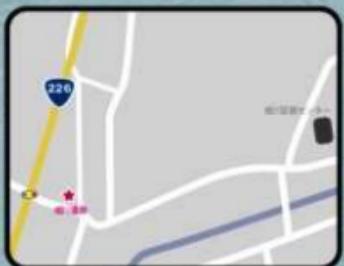
出土土器を観察すると、

日常生活用の土器とは少し異なり、顔料で赤く塗られた土器があつたり、お供え用に特別に作られた器があ

ります。

鉄器はほとんどが剣や刀、鎌などの武器類で、身を飾るためにも見つかりませんでした。鎌には、実際に戦で使うには大きすぎるものも含まれており、剣や刀も折れ曲がっているため、実際に戦いで使ったのではなく、お供え用として特別に用意されたとする説もあります。その後、成川バイパスの開通などに伴って、鹿児島県

令和元年度からは鹿児島女子短期大学と鹿児島国際大学による発掘調査が進められています。この調査からは、当初想定されていた墓域の範囲が広がることや南西諸島に特徴的な形質をもつ人々が葬られていることがわかりました。



住所：指宿市山川成川



本枯節作り

## いふすきかつおぶし 指宿鰹節

本枯節はかつお節の最高級品です。製造期間は半年以上。主に高級料理店で、和食の決め手となるダシに使われます。山川は全国のかつお節が歴史上初めて登場するのは、日本最古の書物『古事記』。『堅魚』という記述があり、これは「鰹」を日に干した、いわばかつお節の原型であったようです。

戦国時代には経起物「勝男武士」として重宝され、戦の時に腰に下げる兵食として普及しました。現在と同様のかつお節の誕生は、江戸時代初期のこと。紀州出身のカツオ漁師二代目角屋甚太郎が、カツオを煙で燻し、ムシロで包んでカビをつける方法を考案したのが始まりです。

翌年には、製造法を習得した山元氏が自家製造を開始。明治44(1911)年には、山川から初めて世にかつお節を出したのです。その後、大正から昭和にかけて、山川でかつお節を製造する他県出身の職人が増え、山川の漁師も次第にかつお節製造へ転換します。

昭和59(1984)年には、外港として水産加工団地を造成。これにより、大型まき網船の入港が可能になり、カツオの水揚げ量は増大し、戦後のかつお節産業を押し上げました。鹿児島藩では、18世紀初頭に枕崎でかつお節の製造を開始し、その後久島などで跳ね返して、わずか70年余りで全国有数の産地に急成長したのです。

江戸時代の山川では、まだかつお節生産は行われていません。山川港は鹿児島藩の藩港であり、国際貿易港としての性格が強かったのです。転機は、山川港が藩港としての役割を終えた、明治時代のこと。明治39(1906)年にカツオの餌カタクチイワシを飼う試験が山川港であり、好成績を挙げました。明治40年代には、漁船の大型化・動力化により、漁場がトカラ列島まで南下。山川港は①かつお漁場への中継地、②餌の供給地、③水揚げ場としての立地条件がそろつたことから、外県の船の入港が増加したのです。そして明治42(1909)年、伊予のかつお節業者が、山川の山元新之助氏の納屋を借りてかつお節の製造を開始します。

翌年には、製造法を習得した山元氏が自家製造を開始。明治44(1911)年には、山川から初めて世にかつお節を出したのです。その後、大正から昭和にかけて、山川でかつお節を製造する他県出身の職人が増え、山川の漁師も次第にかつお節製造へ転換します。

昭和59(1984)年には、外港として水産加工団地を造成。これにより、大型まき網船の入港が可能になり、カツオの水揚げ量は増大し、戦後のかつお節産業を押し上げました。

かつお節生産地の中では歴史が新しい山川。流通面では九州南端と不利な立地ですが、それを県内外各地の技術を導入した品質の良さで跳ね返して、わずか70年余りで全国有数の産地に急成長したのです。

## かいしょう 「こうのかくべえ 海商「河野覚兵衛」

山川の福元墓地にある、ひときわ目を引く大きな五輪塔群。高さは2mを超えるものもあり、ハスや船など多彩な文様が彫りこまれています。これらは、江戸時代に鹿児島藩の御用海商として活躍した、歴代河野覚兵衛とその家族の墓です。

河野家は、代々「覚兵衛」と称する家柄で、伝承によれば島津の殿様から賜った名前とされています。実際、島津家とは想意にしていたようだ。弘化3(1846)年には河野家に第11代鹿児島藩主島津齊彬が一泊し、嘉永4(1851)年には河野家が齊彬に洒1樽、菓子1折り、かつお節10本を贈ったという記録が残っています。



第8代河野覚兵衛写真

第7代覚兵衛は、第10代鹿児島藩主島津齊興と調所広郷が藩の財政改革を行った際、奄美大島や琉球などから得た黒砂糖を大阪方面に運び、「内海の船は減つても河野の潮は引かない」と言われるほどの大半の富を築きました。私財を増やすだけではな

く、朝鮮の際には蔵を開けて米や粟を施し、藩の事業に対しても多額の献金をして感謝されたと伝えられます。なお、河野家の船は奄美大島へ派遣される役人を運ぶのにも使われ、安政5(1858)年、西郷隆盛が奄美大島龍郷に潜居を命じられた際にも、河野家の船で島へ渡ったと伝えられています。海商たちの活発な活動が藩の財政再建の一翼を担い、明治維新の原動力となる財政的な基盤をつくったといつても過言ではないのです。

## 鰻温泉と西郷隆盛



「西郷南洲先生遺跡記念碑」と西郷隆盛像

火口湖・鰻池の湖畔にある鰻地区は、豊かな温泉が湧き出る湯治場として知られています。この鰻温泉に明治7(1874)年、征韓論に敗れて下野した西郷隆盛が、部下2人犬13匹を連れて突然やつて来るのです。鰻地区には、西郷が礼としておいた福井(シャツ)と、後に当時の様子を書き記した「桜山資紀文書」が残されていました。この文書を見ると「西郷さんは毎朝7時前後に起床し、雨

の日以外は開闢岳辺りに獣に出掛けた。獣を4、5匹連れて行つて、捕つてきたウサギは多くて3羽くらいだつた。毎晩入浴して食事を取り、焼酎をちょっと飲んで1~2時前後に寝た。朝夕にチーズや卵などを取つていた」とあり、西郷は湯治と獣を十分に楽しんだことがわかります。

そんな中、西郷の下へ佐賀の乱に敗れた江藤新平が援助を求めて現れます。佐賀の乱は、明治政府への士族反乱の発端。西郷は「相談するあてが違う」と、江藤の頼みをはねつけます。このとき、西郷は自らが新政府へ刃を向けることになると想えていたのでしようか。

そして西郷は、約1カ月滞在した後、従者を連れて出発します。このとき、宿泊先の主人に「猶大を一頭あげよう」と言いましたが、主人は「犬は恐ろしい」と断ります。そこで「それならこれをあげよう」と、自分が着ていた襦袢を与えたのです。

士族最後の反乱である西南戦争が勃発し、城山で西郷が自刃したのは、西郷が蝦夷温泉を後にしたおよそ2年後、明治10(1877)年のことでした。

## 津口番所

つくちばんしょ

山川港は、火山の噴火でできた火口を生かした港です。外海と区切られた入り江はいつも穏やかで、大型船も安心して停泊できる良港。中世から国際貿易港として栄えていました。江戸時代には鹿児島藩の藩港となり、鎖国の世にあつた日本で唯一、琉球王国との貿



津口番所の鬼瓦

易を許されました。山川港は江戸時代を通じて、海外の物や情報の玄関口という極めて重要な場となつたのです。

さて、江戸時代、鹿児島藩内の主な港には、海の関所である津口番所が設けられ、船舶の出入りや旅人の検査、貿易品流通

の管理を行つていました。山川

港にも応永年間(1394~1428)には設けられ、琉球貿易品などの重要な荷物については、必ずここで検査を受けたのです。また、山川の役人には、毎年港の深さを藩に報告することが義務づけられていました。

現在、津口番所の建物は残つていませんが、屋根に使われていたとされる瓦が残っています。瓦の中には「辨喜多九郎兵衛」の刻字があるものがあり、江戸時代に瓦の産地として有名だった大阪の堺で作られたと考えられています。これらの資料は、往時の山川港の姿を物語る資料です。



住所：指宿市山川福元

# 温泉熱を利用した工場な製塩工場



現在の伏目製塩工場

伏目海岸を見むる所で、昭和18年ごろから昭和38年ごろまで、当時の鹿児島化学工業（現在のサンケイ化学）が、8本の井戸を掘り、温泉熱を利用した製塩を行っていました。大正7年に設立されたこの会社は、高濃度マシン油乳剤の製造販売のため、昭和15年12月に群山（現在の韓国の群山市）に進出しました。しかし、日中戦争の拡大による主原料であるマシン油の供給を絶たれてしまい、昭和18年11月には群山から引き上げることになります。

群山を撤退した同社は、戦時中著しく不足していた塩に着目しました。また、燃料不足の時勢を勘案し指宿の豊富な温泉熱を利用した製塩に取り組みます。

同社は既存の温泉を利用した製塩に取り組む一方、伏目では新たな温泉掘削に着手し、約2年を費やして泉源を掘り当てました。その後、日本専

門を建設し、昭和19年には本格製造に入りました。建設資材も不足の折、工場建設は容易ではありませんでしたが、山川工場建設には三井化学工業株式会社から技術者ら14人の応援があり、思いの外、急ピッチで完工できたそうです。

当時の従業員の話によると、事務所から一番遠い設備は断崖絶壁の上にあり、浜風が強く寒いことから「北海道」と呼ばれていたそうです。また、24時間操業であったことや海水を汲み上げることに苦労したこと、従事者用の温泉まであったことなどについて教えてもらいました。後年、指宿塩業組合が設立され、今でも山川駅から見える大きな煙突がその面影を残す成川浜の埋め立て地に、組合共同の精製塩工場が建設されました。そして、山川工場の塩水もそこに一括納入されるようになります。当時は、指宿や伏目沖の海底から成川浜までバイブライインを整備し、高濃度の塩水が運ばれていたというから驚きです。

その後、昭和39年3月に塩業整備法が施行され組合は解散。同時に製塩工場は操業を停止することになったのです。



住所：指宿市山川福元